

サンディーノの実像と英雄像をめぐる  
ニカラグア・ナショナリズムの一考察

小澤卓也

## Summary

### A Study of Nicaraguan Nationalism in Respect of the Heroic Image of Sandino

OZAWA Takuya

Augusto Sandino, “Father of the liberation of Nicaragua” and leader of an armed guerilla band assassinated in 1934, conceptualized the Nicaraguans as the “indian-hispanic-americans,” and attached great importance to this hybridity. This concept derived from the idea of *indigenismo*, which was used to support the incorporation of ethnic groups into white creole’s “national” framework. In this sense, Sandino shared a typical “liberal” thought with the contemporary intellectuals, and refused revolutionary thoughts.

Carlos Fonseca, who established the Sandinista Front for National Liberation (FSLN) in 1961, presented Sandino as the new “National Hero” for the Nicaraguan people. For Fonseca, Sandino’s antiimperialistic and nationalistic words and actions, were potent national symbols that justified the FSLN’s guerilla movements against the dictatorship of the Somoza family and its strong supporter, the United States.

Fonseca added a socialistic and revolutionary image to Sandino who never aimed at socialism nor revolution. Fonseca also tried to create a “National History” stretching from Sandino’s historic rebellion up to the achievement of the soon-to-be-realized revolution by the FSLN in 1979.

## はじめに

1979年、ニカラグアの民衆革命軍が長期にわたるソモサ独裁政権との戦いに勝利し、ラテンアメリカではキューバに次いで社会主義陣営に傾倒した革命政権を樹立したとのニュースは、南北アメリカ地域のみならず、世界中のマスメディアで大きく報道された。これを機に、ニカラグア革命運動の主力であったサンディニスタ民族解放戦線（FSLN）に関する研究が進み、同時にこの組織の名前の由来となり、理想の「国民的英雄」としてFSLNメンバーをはじめとする多くのニカラグア人の心を深く捉えたとされるアウグスト＝セサル・サンディーノの存在にもわかに注目されるようになった。こうした研究の多くは、1920～30年代に国民主権を求めて独裁的なニカラグア政府とその後ろ盾であった米国に対して「勇気ある抵抗」を貫いたサンディーノの思想と運動こそがニカラグア「国民<sup>1)</sup>」を一つに統合し、人々を「革命」へ動員したとする見解を示しており、彼を今世紀のニカラグア・ナショナリズムを考える上で不可欠な国民的象徴であると位置づけている。

ところが、こうした評価にもかかわらず、サンディーノの存在や思想がどのような形で革命のプロセスに関わり、ニカラグアの人々のナショナリズムに影響を与えたかという点に関する具体的かつ客観的な歴史学研究はいまだ十分にはなされていない。その最大の理由は、ニカラグア国内のサンディーノに関する研究や史料編纂の多くがFSLNの創始者であるカルロス・フォンセーカ＝アマドールをはじめとするサンディニスタ系の知識人によってなされ、その偏った歴史解釈がFSLNの革命運動を正当化するための「国民神話」として利用され、国内外の人々に散布される傾向にあったことである。そして、これを史料として利用する国内外の歴史研究者の多くがその神話性に気づかなかつたり、あるいは十分な注意を払わなかったことが、今世紀のニカラグアに関する歴史研究にとって大きな障害となってきたことは否めない<sup>2)</sup>。

こうした現状を考慮するならば、サンディーノをめぐって展開され、サンディニスタ革命へと帰結するニカラグア・ナショナリズムの歴史を、「脱国民主義」的視点から再考することは、南北両アメリカにおいて数少ない「革命」的民衆運動を歴史学的に分析、検討する上で火急の重要性を有していると言える。この目的を達成するためには、まず「神話性」を廃してその思想と運動を整理、分析することによってサンディーノの実像を浮かび上がらせ、それを後にフォンセーカらが創出した「国民的英雄」としての神話的サンディーノ像と比較することによって、史実とフィクションをはっきりと峻別することが先決であろう。その上で、革命運動に大きな影響を与えるサンディーノ像を提示することになるフォンセーカが、実際のサンディーノと思想やアイデンティティの面でどのような歴史的連続性や非連続性を有しているのか、そしてその語りを通じて彼が人々に伝えようとしたものは一体何であったのかについて、論じることにはしたい。

本論文の構成は以下の通りである。まず1で1920年代以前のニカラグア史を米国との政治的

関係を中心に確認した上で、サンディーノ軍の活躍までの歴史を概観し、2においてはサンディーノ自身の思想的特色とその「国民」意識について考察する。そして、3においてFSLNのリーダーであるカルロス・フォンセーカの作り上げたサンディーノ伝説とその中に込められた「国民」的メッセージについて分析し、サンディーノ—歴史上の人物としてのサンディーノと国民伝説の英雄としてのサンディーノ—が今世紀のニカラグア社会において人々の「国民」アイデンティティに与えた影響について考えることとする<sup>3)</sup>。

## 1. 反米ナショナリズムの高まりとサンディーノ軍の台頭

1821年、他の中米諸州と共にスペインから独立し、1854年に共和国となったニカラグアは、その恵まれた地理的条件により早くから欧米先進諸国の興味を引くこととなった。欧米の帝国は、ニカラグアに大西洋と太平洋を結ぶ運河を建設することにより、海上交易に絡む莫大な富と政治・軍事上の優位を手に入れようと画策していたのである。とりわけ米国は、1855～56年に起こった米国人の傭兵隊長ウィリアム・ウォーカーによるニカラグアの軍事占領とその合衆国への編入計画に見られるように、ニカラグアに対する政治・軍事的介入を積極的に進めていった。こうした米国の侵略行為に対し、次第にニカラグア国内のクリオーリオの政治家や知識人たちの間に反米ナショナリズムが芽生えることになるが、他方で彼らが有する植民地時代以来の白人至上主義は根強いものであったため、多様な人種や民族を包含する明確な「国民」意識は生まれなかった。

この曖昧な「国民」意識が具体的な形を取り始めるのが、1893年、マナグアを中心とするコーヒー・ブルジョワと軍部の後押しで大統領に就任したホセ＝サントス・セラヤの時代である。セラヤは「自由主義」の名のもとに国内インフラストラクチャーの整備、外国資本の積極的招致、強制的労働システムの確立などを進めていく一方、大統領の権限を強化して政治の中央集権化を図り、米国のニカラグアへの政治経済的介入に対しては民族主義を掲げてこれを拒絶し、ニカラグア政府が単独で国内に両大洋間運河を建設する権利を主張した。その民族主義的政策の一環としてセラヤは、ミスキート族などの先住民が集住する大西洋海岸およびジャングル地帯の共和国への併合を宣言するなど、都市部の白人および白人系混血住民に対して非白人種をも包含した新しい「国民」空間と「国民」イメージを提示し、人々のナショナリズムを上から強化しようと試みたのである<sup>4)</sup>。

こうしたニカラグア国内の反米、民族主義の高まりに警戒感を強めた米国は、パナマにおける運河建設を急ぐとともに、ニカラグア国内の保守的な反セラヤ派と結んで1909年セラヤ大統領を失脚させた。その後、ニカラグアの税関、銀行、国家予算に関わる中核機関が、実質的に米国政府の手に握られるようになり、米国海兵隊が公然とニカラグア領土内に駐留するようになった<sup>5)</sup>。1916年のブライアン＝チャモロ条約においては、ニカラグアは自国領土内に運河を建設する権利を米国に譲渡し、以後99年間にわたって米国がマイス諸島とフォンセーカ湾に海軍基地を置く権利を承認した。この条約によって、事実上、ニカラグアは米国の保護国となる。

このように内政干渉を続ける米国と、これと結んだニカラグア保守政権に対し、メキシコ革

命やロシア革命の影響を受けた農民や都市労働者の抵抗運動が頻発するようになり、1925年頃から、ニカラグアは事実上の内戦状態に陥った。その中で、最後まで保守政権や米国の懐柔策を拒み続け、ゲリラ戦術を用いて交戦しつづけたのが、アウグスト＝セサル・サンディーノ將軍が組織した国民主権防衛軍であった。

サンディーノは、1895年、ニキノオモに住むラディーノ（先住民と白人の間の混血であるが、身体的に白人的特徴を強く持つメスティーソ）地主のグレゴリオ・サンディーノと、農婦マルガリータ・カルデロンとの間の私生児として生まれた。少年期に目撃したセラヤ派の農民運動指導者ベンハミン・セレドンの米軍による処刑の様は、幼いアウグスト少年の心に米軍に対する最初の憎悪を刻みつけたとされる。その後10代の半ばから、サンディーノは鉱山や商店などで働きながら近隣の中米諸国や米国などを旅することになるが、特にメキシコにおいて革命に参加する経験を得たこと、また混血化による「新人類」を基盤とした独自の民族・文明論を展開したホセ・バスコンセロスや、アプラ党運動などを通じて反米帝国主義、中南米の政治的統一、世界の被抑圧民族・階級との連帯などを主張したビクトル・アヤ＝デ＝ラ＝トーレの思想に触れたことは大きな転機となった<sup>6)</sup>。

やがて、サンディーノは組合運動に接近していくが、このことは、1890年代～1920年代の中米諸国の都市部の労働者や職人が、組合運動を通じて労働階級意識とともに「国民」意識を共有するようになっていた時代背景と大きく関連していた<sup>7)</sup>。彼がスペインの組合運動をモデルにし、「自由か死か」を意味する赤と黒の旗を自軍旗として採用したのは、まさにこの「組合」に対する共感によるものである。特にニカラグアの都市民は、他の中米諸国以上に米国海軍による極めて切迫した主権喪失の危機に直面しており、サンディーノを含めた愛国的政治家や知識人たちは組合運動と共闘することによって米軍、およびこれをこれと結んでいた当時のニカラグア政権を追放しようと考えていた。1920年代には、詩人のサロモン＝デ＝ラ＝セルバがニカラグア労働連盟と手を携えて米国の「帝国主義」に対する闘いを挑んだり、歴史家であると共に組織労働運動の創設者でもあったソフォニアス・サルバティエレが、労働者階級に対して反米的な「国民」意識の高揚を呼びかけていた。しかしながら、彼らの運動は、組織もいまだ未熟であったため、具体的な米国海軍の追放運動につながることはなかった<sup>8)</sup>。

サンディーノはまさにこうした状況を鑑みて、1926年、先住民をも含む貧農を中心としたニカラグア国民主権防衛軍を結成したのである。彼は、ヌエバ・セゴビア山中に解放自治区を設置した後、兵器・兵士数ともに圧倒的優位を誇るニカラグア政府軍、および米軍に対し、巧みなゲリラ戦略を用いて応戦し続け、最後まで米軍側からの和平の呼びかけに応じなかった。サンディーノはニカラグア史上最初に具体的かつ効果的に米国の軍事占領に大打撃を与える抵抗を行ったのであり、この動向が世界の民族自決運動に与えた影響も甚大であった。

苦境に立たされた米軍はサンディーノの主張を受け容れ、ニカラグア人の手による大統領選挙を承認し、1932年には軍事撤退を開始することになるが、このことは米国のニカラグア支配の放棄を意味しなかった。米国は単に直接支配を諦めただけであり、米国首脳が全幅の信頼を置くソモサ＝ガルシアを長官とし、米国海軍によって訓練された国家警備隊を通じた間接支配

を狙っていたのである。1933年、サンディーノは選挙によって大統領に選出されたファン＝パウティスタ・サカサと和平協定を結んで一部武装解除を実行したが、1935年、親米派であり、サンディーノ軍の徹底的な鎮圧を目論むソモサ＝ガルシアの命を受けた国家警備隊に暗殺されてしまう。その後、1979年にサンディニスタ革命が達成されるまで30年以上もソモサ一族の独裁政治が続くことになる。

## 2. サンディーノの思想的特色と国民意識

サンディーノ思想の特色は、第一に、社会階級としての貧農の救済を目的としている点にある。1933年、知人に宛てた手紙の中で、自らの抵抗運動が「搾取される階級と貧困によって苦しめられているすべての人間にとっての生活と文化の中心となっている」地域を取り戻す意図を明らかにしている通り、サンディーノは1920～30年代の多くの政治家と同様に階級闘争の論理を受け容れていた<sup>9)</sup>。既述の通り、サンディーノは組合運動を強く意識していたが、やがて米軍の影響が及ばない山岳農村部に反米闘争の拠点を求め、その地に新たなニカラグア社会を建設する可能性を見いだすようになる。特に、世界恐慌後の経済不振によって失業した多くの貧農を兵士として自軍に迎えることとなったサンディーノは、国家経済の支柱であったコーヒーの大農経営に反対し、富農から徴税したり、協同組合や自己管理団体などを組織することによって貧しい農民を救う具体的政策を講じ、既存の社会経済秩序に新風を吹き込んだ<sup>10)</sup>。

このような政策に共感したため、エルサルバドル共産党のリーダーであったファラブンド・マルティヤ、ホンドゥラスの詩人であり、組合運動の先駆者であったフロイラン・トゥルシオスをはじめ、同時期の他の中南米諸国において既存の寡頭政治権力を脅かす運動を展開していた社会・共産主義者たちが国境を越えてサンディーノ軍に合流し、義勇兵として共に戦うことになった。だが、サンディーノ自身は社会・共産主義政権を樹立する意志を持っていなかった。選挙によってニカラグアの新大統領に選出されたサカサを承認し、彼と穏健的な交渉を行おうとした経緯を見ても、彼が社会主義「革命」を運動の最終目標にしていたとは考えがたい<sup>11)</sup>。

第二の特色として、反米主義、および、それと表裏一体である主権に対する強い願望があげられる。サンディーノは、米国のニカラグア支配や介入に対する憎悪をあらわにし、しばしば米国を「帝国主義者」、「ヤンキー」、「侵略者」、「海賊」などと痛烈に批判した。彼は、ニカラグア人はもともと「温かく、正直で、働き者であり、良い慣習も持っている」にも関わらず、「北米の帝国主義が我々の愛すべきニカラグアにドルの害悪を持ち込み、それが年々遠慮なく政治家集団を退廃させ、道徳的環境を汚染し尽くしてしまった」ために、墮落してしまったのだとする認識を持っていた<sup>12)</sup>。彼にとって、米国を自国から追放し、ニカラグア人の主権を回復することが、何にも増して急務だったのである。ただし、サンディーノ自身は、社会・共産主義者とは異なり、米国の資本主義を制度として攻撃するようなことはなかった。そのため、闘争の初期にサンディーノが受けていたラテンアメリカ諸国の共産党からの支援も、彼の統一戦線的な考えが共産党の強硬路線と相容れなくなると、やがて打ち切られることになった<sup>13)</sup>。

サンディーノ思想の第三の特色として、彼の行動がつねに「ニカラグア国民」の保護と発展

を理由に正当化されている点が挙げられる。このことは、ゲリラ闘争を開始して間もなくの1927年、民衆へ向けて発せられた声明の中で、サンディーノが、「自分がとった行動は国民の尊厳と祖国の主権を守るためのもの」であることを明言していることから分かる<sup>14)</sup>。そして、「国民の尊厳と主権」を回復する正義のために、「私は犠牲になるつもりだ」と述べるなど、「ニカラグア国民」のために喜んで殉死するという自らの「国民」主義的決意について繰り返し語っている<sup>15)</sup>。この種の記述には、死を恐れない「勇敢さ」や「男らしさ」を強調するマチスモ（「男らしさ」を美德とする男性中心主義的思想）に満ちたゲリラ戦士としてのサンディーノの価値観も反映されていた。

ここで、サンディーノにとっての「ニカラグア国民」とは具体的にどのようなものであったのかを検討しておく必要があるだろう。彼の想像する「国民」空間は、先住民ミスキート族が多く居住する広大な大西洋海岸地方を含むものであった。これは、セラヤ大統領の打ち出した「国民」空間概念を継承し、それをさらに発展させ、それまで多くのラディーノにとって同国人と見なされていなかったミスキート族を、「ニカラグア国民」という「想像の共同体」の中に吸収しようとするサンディーノの積極的姿勢を示している。

しかしながら、サンディーノの先住民に関する発言は当時の中南米知識人の間で一般的だったクリオーリョ（もしくは、ラディーノ）的な「ニカラグア国民」を前提にしたものであり、地域の歴史に根ざした先住民の民族アイデンティティにはまったく気づいていなかったか、またはそれを重要視していなかったことは特筆すべきであろう<sup>16)</sup>。現存するサンディーノ言説史料の中に先住民共同体に関して詳述するものがほとんどないこと、そして先住民文化を軽視する発言が見られることなどは、このことを裏付けている。

例えば、サンディーノのもとを訪ねたバスク人記者の眼前で、自軍に参加する先住民の知性を見せつけようとした際の発言に注目してみよう。サンディーノは、記者の前に二人のセゴビア出身の先住民を連れだし、順番に英語、ミスキート語、スペイン語で話をさせ、次のように言った。

「さあ、もうあなたたちは彼ら（先住民）が確かに知的だということがわかっただろう。それにもかかわらず、彼らは見捨てられ続けてきた。10万人ほどのインディオが、コミュニケーションも学校もなく、政府から何も与えられていないのだ。そういう場所にこそ、私は彼らを向上させ、真の人間にするための植民を実現したいのだ。」<sup>17)</sup>

この発言の中で、サンディーノは先住民の潜在的に高い知性を明らかにし、彼らを不当に扱ってきた政治権力者たちを批判しようと試みているのだが、図らずもその語りにはいかにして早く先住民文化をラディーノ化させるかという彼自身の文化的「白色化」への信奉が表出している。サンディーノは「インディオ文化」を後進的で、野蛮なものに見なしていたのであり、それゆえに、彼は先住民たちを「向上」させなくてはならず、人間として不完全な彼らを「真の人間」に作りかえなければならぬと発言したのである。

このようにサンディーノは、一方で先住民文化の「後進性」を意識しながら、他方で先住民の存在を積極的にニカラグア国民アイデンティティの中に取り入れていかねばならない矛盾に

直面していた。人種としての先住民の「血」は肯定し、「国民」概念の中に回収するが、その「文化」については否定し、欧米的（＝白人的）近代化を求めるといふ論理は、少数派の白人クリオーリョによって構成されるエリート層が、大多数の貧しい有色・混血農民を支配する社会構造となっている中南米諸国の「国民」意識形成の過程で広く見られるものである<sup>18)</sup>。この点から見れば、サンディーノは、同時代を生きる多くのラテンアメリカ政治家や知識人が共有していたインディヘニスモ（先住民族を多数抱えているラテンアメリカ諸国で起こったナショナリズムの一つの表現であり、先住民族の存在と歴史に自国のアイデンティティを求める思想や運動<sup>19)</sup>）的思想の限界を越えることはなく、ペルーのマルクス主義者、ホセ＝カルロス・マリアテギのように先住民問題を先住民を主体として社会的に解決しようとする思想を持つには至らなかったと言える<sup>20)</sup>。

また、サンディーノのゲリラ軍にはサン・ルカス、テルパネカ、ヒノテガなどからの先住民の参加が見られるが、それでもチョンタレスからヌエバ・セゴビアに至る先住民人口の大部分は、サンディーノ側にも米国海軍側にも立っていなかった。多くの先住民共同体はこの保守派・米軍とサンディーノ軍の間の対立を利用しようと考えており、彼らによるコーヒー・プランテーションの占拠などが相次いだ<sup>21)</sup>。すなわち、大多数の先住民も、サンディーノの運動を「国民」的なものとは解釈していなかったのである。

サンディーノが、しばしば混血種としての「インド＝イスパノ・アメリカ人」（インディオとスペイン人両方の血を持つアメリカ人）という曖昧な言葉を「ニカラグア国民」や「ラテンアメリカ人」とほぼ同義語で使用しているのはまさにこれらの矛盾から逃避するためであろう。この言葉に込められた「混血性」は、サンディーノの国民意識の根幹に関わる概念であり、この「混血」という基本的な価値に背くものは、彼にとって人種統合に対する大きな脅威として認識されたのである<sup>22)</sup>。

例えば、1927年7月の声明の中で、サンディーノは「ニカラグア人、中米人、そして、インド・イスパノ族の人々」に向けて、次のように主張している。

「私はニカラグア人であり、それを誇りに思っている。なぜならば、私の体をめぐる血管の中に、何よりもまず、インディオの血があり、その血には先祖返りによって愛国的、忠誠心があり、誠実であるという神秘が含まれているのである」<sup>23)</sup>

サンディーノはこの「ニカラグア国民」をイメージさせる「インド＝イスパノ・アメリカ人」の概念を拡大し、他の中米諸国、そして、全ラテンアメリカまで射程に入れていく。米国など欧米の大国と戦うためにラテンアメリカ地域内の協調と結束を呼びかける論調は、シモン・ボリバル以来、自国の政治、経済、軍事的不利を承知しているクリオーリョやラディーノの反帝国主義者たちや理想主義者の主張にしばしば見られたものである。サンディーノは、「ボリーバルの究極の夢を実現する計画」と称して中南米21ヶ国を統合する連邦国家の建設を提言したが、それはまさにボリーバルが夢見ながらその建設に挫折した中南米連邦国家の再現であった<sup>24)</sup>。ここからも、サンディーノが白人クリオーリョ的価値観を受容していたことが分かる。

しかしながら、「私はニカラグア人であり、それを誇りに思っている」と強調していること



からも分かる通り、サンディーノが基本的にはニカラグアに自己アイデンティティを求めていることは疑いない。サンディーノにとっては、まず「ニカラグア国民」としてのアイデンティティがあり、それを基盤として他の国民と手を携えることによって、より大きなラテンアメリカ民族意識を育て、米国などの大国に対抗しようと考えたのであろう。

そして、先住民の「血」が混じった混血民であることこそが、祖国ニカラグアに対して「愛国的で、忠誠心があり、誠実である」国民たらしめているという内容からも、基本的には「混血」が「ニカラグア国民」の特色であることをはっきりと示している。これは、19世紀末以降のニカラグアを代表する文学者であるルーベン・ダリオやパブロ＝アントニオ・クアドラなどの著作によってすでに定式化されていた「トウモロコシ（先住民の主食）によって養われた身体にスペインの獅子の精神が宿っている」とする「混血のニカラグア人」イメージが原型になっていると考えられる<sup>25)</sup>。しかも、声明中の「神秘」という言葉に表現されているように、サンディーノは「インディオの血」にエキゾチックな魅力を感じ取っている点は興味深い。

このように、実在のサンディーノは、貧しい農民たちの救済を訴えながら、国民主義、反帝国主義を掲げてニカラグアへの内政干渉を続ける米国の追放を試みた山岳農民ゲリラ軍の優れた指揮官であった。彼は、「混血人種」としての「インド＝イスパノ」族という国民イメージを普及させることによって人々の反米ナショナリズムを喚起すると同時に、その概念をラテンアメリカ全土に拡大して欧米帝国主義に対抗しうるラテンアメリカ地域内の結束をも呼びかけようとしたのである。

サンディーノの武装抵抗運動は、たとえ弱小国であっても強い結束力とゲリラ戦術を通じて巨大な政治、経済、軍事的国家の侵略に対抗し、主権を守ることができることを世界の人々に知らしめた点で重要な意義を持つ。しかしながらその「国民」観には、バスコンセロスやアヤ＝デ＝ラ＝トーレなども含め、当時の中南米知識人に広く見られる典型的なインディヘニスマが反映されており、先住民文化の「近代化」を前提とするものであったことも否めない<sup>26)</sup>。そのため、サンディーノの提示した「混血」国民像は具体的なものとは言い難く、多分に抽象的な概念であったので、現実にはスペイン語能力が先住民と白人・混血とを結びつける唯一の分かりやすい「共通文化」として認識されていたのである。インディオたちがスペイン語を話し、自分たちと共に戦っているということは、彼にとってインド＝イスパノ族の概念的正当性を確認することであった<sup>27)</sup>。

ただし、当時のニカラグア国内では、サンディーノ軍に関する情報が大衆紙などの紙面において肯定的に取り上げられることはなかった。サンディーノの暗殺は、「セゴビア地域を襲っていた盗賊」の国家警備隊による殺害であると多くのニカラグア人に伝えられたのである<sup>28)</sup>。このような状況下では、サンディーノが「国民的英雄」として広くニカラグアの人々に認知されるはずもなかった。多くのニカラグア人は、サンディーノの死後に様々な著作を通じて彼のことを「英雄」として受容するようになるのである。

### 3. フォンセーカと神話化されたサンディーノ

サンディーノの死後、ソモサ独裁体制が強化されていく中で、サンディーノを「国民解放運動の父」と見なし、その山岳・農村ゲリラ戦術を継承することによって、ソモサー族、および、それを支援する米国と戦う決意をした革命派学生組織が、後にニカラグア革命の立て役者となるサンディニスタ民族解放戦線（FSLN）であった。彼らは、ニカラグア社会にサンディーノの姿を蘇らせつつ、ソモサ独裁政権の追放と米国の介入を排した新国家建設を標榜しながら、大衆的闘争を行うための条件を少しずつ準備していった<sup>29)</sup>。その中でも、最初にサンディーノの思想、英雄的行為、そして、人間像などについて研究し、その結果を様々なメディアを通じて人々に伝える核となった人物が、FSLNの中心的創立者であり、革命派の知識人であったカルロス・フォンセーカ＝アマドールである。

フォンセーカは、1936年、ソモサ家所有の農牧地管理者であった父ファウスト・アマドールと、その女中フステイーナ・フォンセーカとの間の私生児として、マタガルパに生まれた。高校生の時にはすでにマルクスの著作（ヴェトナム版）に熱中し、反ソモサ学生運動を組織するなど、若くして反政府運動に身を投じた筋金入りの革命家であった。やがて大学学生連盟のリーダーとなったフォンセーカは、1957年にモスクワで開催された革命派青年の集いである「世界若者の祭典」にニカラグア代表として参加している。帰国後、フォンセーカは投獄されるが、獄中で自らのモスクワでの経験や印象を『モスクワのニカラグア人』にまとめ、その中で彼はソ連社会を理想化し、それをニカラグア人が目指すべき社会主義国家のモデルとした。

このように、典型的なマルクス主義者であったフォンセーカが、サンディーノを「国民的英雄」として人々に紹介しようと努力を重ねたのは、この「英雄」に対する個人的な憧れや尊敬以上の意味をそこに見いだしていたからに他ならない。フォンセーカは、ソモサ主義に対する大衆の政治的拒絶に拍車をかけるためにサンディーノの思想を蘇らせ、その国民主義的で、反帝国主義的な哲学を完成することを狙っており、「国民」の名の下に、FSLNの活動を正当化し、人的資源を自らの組織に吸収して革命遂行のための力を蓄えようとしていた<sup>30)</sup>。彼は、ニカラグアにおける革命を成功に導くためには、標準的なマルクス＝レーニン主義的理論や戦略だけではなく、土着的根源や国民的なものに基礎づけられたイデオロギーが必要だと考えていたのである<sup>31)</sup>。

フォンセーカは、サンディーノを「ヤンキー帝国主義に対する（南米）大陸の伝統的抵抗のシンボル」や「ラテンアメリカ人民の愛国的反逆を代表するイメージとなったニカラグアの英雄」と位置づけ、米国帝国主義に抵抗する中南米のシンボルであると印象づけた。また、「サンディーノの高い地位は、その立派な継承者たるチェ・ゲバラによって明確にされた」と述べるなど、サンディーノの思想と行為が世界的に著名な革命家たちに受け継がれたことなども強調している<sup>32)</sup>。

ここで注目すべきことは、英雄・サンディーノを描くフォンセーカの記述の中に、反帝国主義や国民主義といった実在のサンディーノの思想の特色に加え、実際にはサンディーノが有し

ていなかった社会主義的な「革命」のイメージが付与されていることである。既述の通り、ラディーノ的なナショナリズムを抱いていたサンディーノは、レーニンの「国家の死滅」を信じる当代の革命家たちとは根本的に相容れなかったし、イデオロギーとしての社会・共産主義を受け容れることもなかった。それにもかかわらず、フォンセーカがサンディーノのマルクス主義的で革命的な性格を捏造したのは、一方でサンディーノを「国民的英雄」とし、その「国民」の名の下にサンディーノの後継者を自認するFSLNを正当化しながら、他方でFSLNが目指す革命による社会主義国家の建設を、ニカラグア「国民」にとっての当然の歴史的帰結であると位置づけたかったためであろう。

実際にフォンセーカは、こうした歴史意識を社会に普及させるため、新しい「国民史」の執筆を精力的に行った。その内容を具体的に見ながら、フォンセーカがどのように英雄・サンディーノとFSLNを「国民」、および「革命」をキーワードにして歴史的に結びつけようとしたのかについて以下で検討したい。

まず、スペイン植民地時代に関して、徹底的なスペイン帝国批判を展開しているが、その記述からフォンセーカの「国民」概念がサンディーノのそれをほぼそのまま継承していることがわかる。フォンセーカは、「クリストバル・コロン(コロンブス)がアメリカへ漂着して以来、スペイン人、ポルトガル人、そして、イギリス人がアメリカ人の肉体を白色化してきた」であるとか、「スペインは宗教、言語、白い肌をアメリカに持ち込んだ。スペインはヨーロッパに金を持ち去った」など、スペイン人が先住「アメリカ人」社会を踏みにじったと非難している<sup>33)</sup>。だが、現実にはFSLNリーダーの多くは白人クリオーリョかその血を濃く持つラディーノであり、フォンセーカ自身もイタリア系白人であるので、この批判は本来なら自分たちにはね返ってくるはずである。それにもかかわらず、何の躊躇もなく「白人」を激しく非難することができたのは、彼らが自分たちをサンディーノが言うような「インド=イスパノ」系混血という観念の中に置いてたからこそであった。

そのことを如実に表しているのが、1881年にマタガルパで起こった「インディオの戦争」と称される先住民反乱について語るくだりである。フォンセーカは、この反乱に参加した人々について、「実際には、彼らは先住民ではなく、スペイン語で自己表現し、人種的には先住民起源が優勢であることを示してはいるが、すでに彼らの土着言語で語らないメスティーソ農民が問題とされている」と述べている。また、この反乱は、後に「サンディーノが統率する素晴らしいゲリラ戦の前身として注目すべきである」とし、この地にはサンディーノの従者が多く出現したと誇らしげに語っている<sup>34)</sup>。これらの表現からも分かるとおり、フォンセーカが、暴動を起こした民衆が先住民ではなく、メスティーソ(混血)であったとする根拠は、サンディーノと同様に「スペイン語を話す」という一点のみであり、より重要と思われる住民の慣習や文化に対する考察はなされていない。

しかし、最近の研究によれば、20世紀初頭のニカラグアには全人口のおよそ35%にあたる先住民が存在し、マタガルパには特に多くの先住民が集住していたことがわかっている。彼らの多くはラディーノによる人種差別から身を守るために、自分たちの伝統的な衣装を捨て、人前

で自分たちの言語を話さないように心がけ、仕事を得るためにスペイン語を話さねばならなかった。この頃になると、コーヒーや綿花などの資本主義経済の波が地方農村社会をも呑み込みつつあり、先住民の多くもこの新システムの中で生きていかなければならない現実があった。「インディオ」という言葉は、ラディーノにとって「後進性」や「無知」という言葉と同義語となっていた状況下<sup>35)</sup>、先住民たちはそうしたラディーノ的価値観に対して伝統的服装を脱ぎ捨てたり、スペイン語を学習するなど一定の文化的譲歩、もしくは現実的対応を迫られていたのである。

ところが、フォンセーカは、こうした先住民社会の実情に対して、サンディーノと同様に理解不足であった。1969年のFSLN綱領において、フォンセーカを中心とするサンディニスタは、ミスキート族などの先住民が多く居住する「完全に見捨てられ無視されてきた大西洋岸地区を国の生活に統合する」計画を打ち出しているが、その内容は何よりもまず「後進的」な先住民の「近代化」を前提とするなど、典型的な統合主義的インディヘニスモの傾向を示していたこともこのことを裏書きしている<sup>36)</sup>。結局のところ、フォンセーカは、サンディーノ譲りのラディーノ的な混血「国民」意識によってしか先住民問題を解決する術を持たなかったことが分かる。

さて、フォンセーカの国民史叙述の内容に戻って19世紀前半の独立から20世紀中葉におけるFSLNの台頭までの近現代史を検討してみよう。

スペインからの独立以降のニカラグア史に関して、フォンセーカはそれをモンロー宣言を起点とし、止まることなく繰り返される米国のニカラグアに対する侵略と支配の歴史であり、それに対する愛国的ニカラグア人との戦いの歴史であると概観している。この反米帝国主義的な歴史観はサンディーノから継承されたものであると言えるが、階級意識に関しては、サンディーノが単に「貧民の救済」を求めているのに対し、フォンセーカはそれに加えてマルクスの視点からブルジョワを厳しく批判している点で異なっている。例えば、サンディーノが民族主義者として米国と闘った点で評価していたセラヤ大統領に関して、フォンセーカは、国家を近代化し、外国勢力から国民主権を取り戻した愛国者であったが、プロレタリアートに支持されない「ブルジョワ政権」であったために失脚した政治家であると性格づけている<sup>37)</sup>。

さらにフォンセーカは、セラヤ失脚後に締結されたブライアン＝チャモロ条約をニカラグアが米国に支配されてしまう最大の危機であるとし、この絶体絶命の国民的危機を救うために立ち上がった人物こそがサンディーノだとしている<sup>38)</sup>。フォンセーカは、サンディーノを繰り返し「農民出身の労働者」と形容し、彼が「プロレタリアート出身の英雄」であることを読者に印象づける。その上で彼は、サンディーノを親米政権によって裏切られ続けてきた「多数のニカラグア民衆の怒りを代弁した」英雄として位置づけ、その反乱は「ニカラグア民衆の魂に宿っていた意識」に突き動かされたものだと説明している<sup>39)</sup>。サンディーノは、「国民の独立を実現するために、武装闘争の決定的な役割について明確な意識を持って」いた「永遠に非合法の国民的英雄」であり、「疲れ知らずの愛国的、そして、革命的エネルギー」を持ったカリスマとして描かれたのである<sup>40)</sup>。

これらの「国民史」の中の表現から、フォンセーカがいかにして「革命」などのマルクス主義的な要素をサンディエーノのナショナリズムと結びつけるために知恵を絞っているかが窺えよう。フォンセーカは、巧妙にこの「国民的英雄」の性格を、プロレタリアートの、「非合法」という言葉に隠喩されたゲリラ戦士であり、そして、「革命」的な愛国者だと設定しているのである。

そして、フォンセーカは、FSLNこそが「国民的英雄」サンディエーノの運動を引き継ぐものであるとして、次のように述べている。

「(FSLN の) 国家警備隊に対する人民のゲリラ戦争は、愛国者サンディエーノが国民主権防衛軍と共におこなっていた国家警備軍やヤンキー侵略者に対する闘争の継続なのである。」<sup>41)</sup>

このような FSLN の反ソモサ・ゲリラ闘争の将来に関して明るい見通しを立てていたフォンセーカは、彼らが指導するニカラグアの「国民的、社会的解放は、多くの大衆的集団によって支えられ、もっとも進んだ革命的原理によって方向づけられた武力行動を通じて達成されるであろう」と述べ、その成功に自信をみなぎらせていた<sup>42)</sup>。

さらに、フォンセーカは、英雄・サンディエーノと FSLN に込められた「国民主義＝革命主義」イメージを補完するために、マルクス主義とカトリック教義の融合・共存イメージを作り上げる努力も怠っておらず、「マルクス主義の信条は、ニカラグア民衆の宗教的信心に対する尊敬を拒否するものではない」であるとか、「サンディニスタ戦線においては、本当の革命家たちと本当のキリスト教徒の間の統合が土台をなしている」などと繰り返し訴えかけている<sup>43)</sup>。全人口の80%以上にのぼる人々がカトリック信者であるニカラグアにおいて、こうした言説はカトリック信者をもサンディエーノに込められた「国民主義＝革命主義」観念へと惹きつけていった。こうした呼びかけに応じて、後に「解放の神学<sup>44)</sup>」を実践する多くの聖職者たちが FSLN の闘争に参加することになり、革命の「国民的」イメージがさらに強化されることになる。

以上のように、フォンセーカは、様々な手法を使ってサンディエーノが「国民的英雄」であることを人々の意識に浸透させようとしたが、同時に、歴史事実に関するある種の誇張や捏造を行い、サンディエーノという英雄像を介してマルクス主義革命が「国民」的なものであると読者にイメージさせようともしていた。それは、史料に準じて著されたサンディエーノの自叙伝というよりは、むしろ、「国民的革命家」としてのサンディエーノ神話を作り上げようとするものであった。そして、それは紛れもなく当時の FSLN の政治的意図に沿ったものであり、国家警備隊の圧力下で苦戦していたフォンセーカが、FSLN メンバーやその他のニカラグア人を鼓舞するために、サンディエーノのような死を恐れない「英雄的な」戦いを呼びかける意図を内在したものであった。やがて、フォンセーカのサンディエーノ伝説や国民史観は、他のサンディニスタ指導者やゲリラ兵士、FSLN 支持者へと普及し、ソモサ独裁政権に対して革命運動を続ける彼らの精神的支柱の一つとなっていく。

## むすびにかえて

フォンセーカの歴史叙述は、革命によって成立したサンディニスタ政権下で公的な「ニカラグア国史」とされ、それに伴ってサンディーノの思想や運動も「国民文化」の一部と見なされるようになった。革命政権が人々に配布した『サンディーノ英雄伝』という小冊子の中でも述べられているように、「母国、ナショナリティ、そして、愛国主義に関する概念が、サンディーノを彼の時代で最も革命的な人物にした」とする歴史認識が「正式」に採用された<sup>45)</sup>。テンガロン・ハットをかぶったサンディーノのシルエットが、少なくともサンディニスタとその協力者にとって、革命と、反帝国主義と、ナショナリズムの「公式な」シンボルとなった瞬間であった。

実在のサンディーノは、たしかに貧しい農民を搾取する政府からの「国民」解放を実現するために努力し、ニカラグアへの内政干渉を続ける米国を退却させるために農民ゲリラ兵を率いて戦った点で極めて重要な歴史的意義を有する。しかしながら、サンディーノにとっての「国民」は、当時の多くの知識人と同様に、「文明的」なクリオーリョ＝ラディーノ文化の中に「野蛮」な先住民を取り込むことによって生まれる混血のインド＝イスパノ民族概念を基盤とするものであった。その運動の過程で、彼は貧農の救済や協同組合運動を推進したが、これらの政策は社会主義国家の樹立や革命運動を念頭において行われたものではなく、まさに「混血国民」の統合と平等の意識によって動かされたものであった。そして、このようなサンディーノ思想は、国家による徹底的な情報操作によってほとんど当時のニカラグアの人々には伝達されなかったため、彼が直接的にニカラグア・ナショナリズムに与えた影響は必ずしも大きいとは言えなかった。

これに対して、サンディーノを英雄視する FSLN の創設者カルロス・フォンセーカは、サンディーノ思想の国民主義と反帝国主義を継承しつつも、それに実際のサンディーノ思想には見られなかったマルクス＝レーニン主義的な「革命」という属性を与えつつ、サンディーノを「国民的英雄」とする「国民史」、もしくは、「国民的神話」の創設を試みた。これは、社会主義革命を標榜していた当時の FSLN 執行部が、サンディーノに始まる国民史の延長線上にあることを印象づけ、その革命イデオロギーと活動を「国民」の名の下に正当化しようとする意味合いが大きかった。こうして誕生した「伝説としてのサンディーノ」は、多様なニカラグア民衆の間で共有される「国民」シンボルとなり、反ソモサ闘争に「国民」的なイメージを与えることに貢献することとなった。すなわち、革命に至るニカラグア現代史において重要な役割を果たしたのは、サンディーノ自身の思想というよりは、フォンセーカの著作の中で新たな生命を吹き込まれたサンディーノという偶像化された「国民的革命戦士」であったと言えよう。そして、それは実在のサンディーノから離れて一人歩きを始め、民衆をニカラグア革命に動員する役割を果たしたのである。

しかしながら、その「国民」史叙述において、フォンセーカがサンディーノの主張していた観念的で、クリオーリョ＝ラディーノ的な「混血国民」概念をそのまま反映させたことは、後

のサンディニスタによる抑圧的な先住民政策を規定し、それに対する先住民の反発とそこから生まれる彼らの反「国民」精神を育成するというその後の皮肉な歴史の呼び水となってしまう。革命を達成した後のサンディニスタ政権が、先住民などの社会制度や文化を異にする国内のマインオリティーに対し思想統制を行い、マルクス主義という新たなラディコー的思想、および制度を強制した結果、多くの先住民たちが革命政権に反目することとなったため、サンディニスタは彼らにとっての「国民的英雄」とはなり得なかった。この点で、先住民の側から眺めた英雄サンディニスタは、「国民」の論理の下で様々に形を変えながらも中南米社会から消滅しない本質的な人種問題の歪みを代表する、上からの「近代化」過程の生み出した亡霊であったと考えられるが、この点に関しては稿を改めて論じることにしたい。

## 註

- 1) ベネディクト・アンダーソンは、「国民=ネイション」とは様々な文化的手法を通じてイメージとして心の中に「想像された政治共同体」であり、それは本質的に限定的な空間を意味すると同時に、主権を有する唯一の共同体として想像されるとしている。本稿における「国民」概念の使用は基本的にこの概念に立脚している〔Benedict Anderson, *Imagined communities* (London: Verso Editions, 1983), 15〕。
- 2) 加えて、ニカラグア革命が米ソ対立を基盤とする世界的な東西冷戦構造を大きく揺るがしうる大事件であると捉えられたために、これに関わるニカラグア研究の多くがそれぞれの政治イデオロギーを正当化するために革命の是非を問うという一種の政治的プロパガンダの道具として利用される傾向にあったことを指摘しておきたい。この革命を第三世界における理想の社会主義革命、もしくは中南米のエキゾチックな民衆革命として美化する論調と、それとは逆にこれをたちの悪い全体主義革命と位置づけたり、西欧的な自由主義に対する脅威と見なす批判が真っ向から対立するなかで、サンディニスタの歴史的な位置づけもイデオロギー的バイアスを通してなされることが多かった。
- 3) 本稿で述べるサンディニスタの実像とイメージ像は、必ずしも単純な対照をなすものではない。「実像」から「英雄像」へそのまま転写された思想や性格も存在することをここで今一度確認されたい。
- 4) Victor Acuña, "Artesanos, obreros y nación en Centroamérica en el período liberal(1870-1930)," *Revista de Historia*, No. 2 (Managua: Instituto de Historia de Nicaragua, Universidad Centroamericana, 1992-1993), 42.

ホセ=サントス・セラヤはニカラグアの初期ナショナリズムの性格と動向を考察する上で極めて重要な人物であるが、彼をナショナリズム形成の歴史の中に位置づける詳細な研究はいまだ為されていない状況である。優れた研究発表が待たれるところである。

セラヤは、米国のニカラグアへ政治経済的進出に対して、一方で「国民(=民族)」主義的抵抗を試みながら、もう一方でホンジュラスやエルサルバドルの政治に介入し、これらの国々を自らの権力下において「中米大共和国 (la República Mayor de Centroamérica)」を結成しようと試みた。ニカラグア一国では強大な米国に抵抗できないとの読みから、中米諸国の連合を成立させ、これに抵抗しようと試みたのである。この「国民主義」と「中米主義」、もしくは、「ラテンアメリカ主義」の双方を視野に入れた政治運動のあり方は、19世紀末~20世紀初頭の中南米政治家や知識人の中でよく見られるものであり、サンディニスタもその影響を受けたと考えられる。この「中米大共和国」結成の動きは、中米における政治的リーダーシップをニカラグアに奪われることを恐れたグアテマラ、メキシコ、そしてとりわけアメリカ合衆国の反発、介入を招いたため、失敗に終わることとなった〔Héctor Pérez, *Breve historia de Centroamérica* (Madrid: Alianza Editorial, 1985), 100-101〕。

- 5) Knut Walter, "La problemática del estado nacional en Nicaragua," *Identidades nacionales y estado moderno en Centroamérica* (compiladores Arturo Taracena y Jean Piel, San José: Editorial de la

Universidad de Costa Rica, 1995), 166-167.

- 6) メキシコにおいてサンディーノが受けたバスコンセロスやアヤ＝デ＝ラ＝トーレの思想的影響に関する情報の多くは、崎山政毅氏による助言や文献紹介から得られたものである。この場を借りて感謝申し上げたい。また、バスコンセロスとアヤ＝デ＝ラ＝トーレの思想と特色などに関しては、本脚註25を参照されたい。
- 7) Acuña, 42-46.
- 8) Acuña, 48.
- 9) Augusto Sandino, "Carta a Alfonso Alexander," 7 de julio de 1933, Archivo Histórico del FSLN, Fondo Sandino; Michelle Dospital, "La construcción del estado nacional en Nicaragua: el proyecto sandinista (1933-1934)," *Revista de Historia*, No. 2, 58.
- 10) Dospital, 58.
- 11) サンディーノは共産主義者ではないが、自分たちの抵抗運動を有利に展開する上で広範な支援を求め、マルクス主義者たちと同盟することも厭わなかったという見方に関して、私はハリー・ヴァンデン&ゲイリー・プレヴォストの研究とほぼ一致する。ただし、何の説得的な歴史史料も例示せずに、サンディーノが「被抑圧者たちの世界大の革命を通じて搾取と資本主義システムを廃止する欲望」（傍点は小澤による）を共産主義者たちと共有していたと断ずる彼らの見解に、私は賛同できない〔Harry Vanden, Gary Prevost, *Democracy and socialism in Sandinista Nicaragua* (Boulder & London: Lynne Rienner Publishers, 1993), 27-29〕。
- 12) Augusto Sandino, *El pensamiento vivo*, Tomo 1, 2 ed., Introducción, selección y notas de Sergio Ramírez (Managua: Editorial Nueva Nicaragua, 1984), 398-399.

サンディーノの公的な政治声明文や知人への手紙を集めた本書は、サンディーノの考え方や価値観などを知る上で貴重な資料となっている。

ただし、編者のセルヒオ・ラミレスは、サンディニスタ革命政権における副大統領であり、後述するカルロス・フォンセーカに見られるサンディーノを核とした「国民神話」を継承している。そのため、彼が選択したサンディーノの書簡は、この「国民神話」を強化する目的で取捨選択された可能性があるため、本書を歴史資料として利用する場合にはそのことを十分に念頭に置いておく必要がある。
- 13) 加茂雄三『地中海からカリブ海へ』（平凡社、1996年）、141-142。ただし、このことを示す史料の有効性を疑問視する研究者もいることを申し添えておきたい。
- 14) Sandino, *El pensamiento vivo*, 123.
- 15) Sandino, *El pensamiento vivo*, 70.
- 16) Jeffrey Gould, "Nicaragua: la nación indohispana," *Identidades nacionales y estado moderno en Centroamérica*, 260.
- 17) Jeffrey Gould, *El mito de "la nicaragua mestiza" y la resistencia indígena, 1880-1980* (San José: Editorial de la Universidad de Costa Rica, 1997), 152-153.
- 18) 例えば、19世紀後半のグアテマラにおいても同様の傾向が見られる。詳しくは、拙稿「グアテマラ国家の〈国民〉創設計画について（1871-1920年）」『立命館文学』第555号（立命館大学人文学会、1998年）を参照のこと。

また、日本史にもこれと同様の傾向が見られる。例えば、テッサ＝モーリス鈴木氏は、日本において和人（＝内地人）がアイヌ民族を「日本国民」の論理の中に取り込み、その視点からのみアイヌ社会や文化を解釈してきた近現代の歴史について興味深い研究を発表している。彼女によれば、和人は日本北方領土をロシアなどの外国による攻撃や侵入から防御するために、「国民」の論理を基盤にして、アイヌを「和人と同一視できる可視的な徴でもって刻印する必要があった」と指摘している。しかしながら、同時に和人は、アイヌを自分たちに隷属する存在としてもとどめ置こうとしたため、彼らを「野蛮」であった頃の「日本人の過去の姿」であるとし、「死滅するか、もしくは国民国家の〈近代化をせまる〉構造に同化するかの運命にある」と見なしたという〔テッサ＝モーリス鈴木著、大



川正彦訳『辺境から眺める』（みすず書房、2000年）、20、43】。

この視点から、当時のニカラグアを考察するならば、サンディーノが米国という「敵」と相対するために、先住民を自分たちと同じ「国民」と見なしつつも、彼らをやがて「近代化」されてゆくべき人々としてラディーノから差異化していたと考えることも可能であろう。しかし、このことを実証するためには、より綿密な研究が必要となろう。今回は問題提起するにとどめておきたい。

- 19) 国本伊代『概説ラテンアメリカ史』（新評論、1992年）、208。
- 20) ホセ＝カルロス・マリアテギ著、辻豊治、小林致広編訳『インディアスと西洋の狭間で』インディアス群書16巻（現代企画室、1999年）、222。
- 21) Gould, "Nicaragua: la nación indohispana," 259.
- 22) Gould, "Nicaragua: la nación indohispana," 262.
- 23) Sandino, *El pensamiento vivo*, 117.
- 24) Augusto Sandino, *Escritos literarios y documentos desconocidos*, (Managua: Ministerio de Cultura, 1980), 75-91.
- 25) 小林致広「略奪されたアイデンティティの模索」『外国学研究』XXXIV（神戸市外国語大学外国学研究所、1995年）、1。
- 26) メキシコの教育の近代化のために文部大臣を務めたこともあるバスコンセロスは、シケイロス、リベラ、オロスコなどの壁画運動を支援するなど文化的な手段を用いて人々の間にメキシコ「国民」意識を移植しようとした。しかしながら、近年、彼の「国民」意識の基盤となる「混血 (=mestizaje)」の概念は、19世紀のラテンアメリカ知識人の間で一般的であった白人至上主義を完全に否定したのではなく、むしろ「白人」の血と文化の拡散を求める形での混血概念であったと説明する優れた研究も発表されている [Lourdes Martínez-Echazábal, "Mestizaje and the discourse of national/cultural identity in Latin America, 1845-1959", *Latin American Perspectives*, Issue 100, Vol. 25, No. 3, (Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, 1998), 33-35を参照されたい]。  
また、アヤ＝デ＝ラ＝トーレも、国民生活への先住民の統合や先住民の「近代化」の必要性について明言するなど、ペルー先住民の抱える諸問題を「白人系混血」を前提とする「国民」形成によって解決されるべきだと考えていた [崎山政毅「アンデスのアヴァンギャルドファシズムに抗するラテンアメリカの〈他の歴史〉」小岸昭・池田浩士・鶴飼哲・和田忠彦編『ファシズムの想像力』（人文書院、1997年）、182、を参照されたい]。  
こうした「国民」意識を前提にしたインディヘニスモ的思考は、サンディーノの「混血国民」意識形成に大きな影響を与えた。
- 27) Gould, "Nicaragua: la nación indohispana," 262.
- 28) Denis Heyck, *Life stories of the Nicaraguan Revolution*, (New York-London: Routledge, 1990), 188.  
本書は英語版で発行されているが、革命政権期に至る20世紀の歴史を生き抜いた政治家、聖職者、農民や学生など24名のニカラグア人の証言を聞き書きしたものであり、ニカラグア社会の実態を知る上での貴重な一次史料である。
- 29) Walter, 173.
- 30) Mark Everingham, *Revolution and the multiclass coalition in Nicaragua* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1996), 53.
- 31) *Everingham.*, p. 104.
- 32) Carlos Fonseca, "Con la bandera de Sandino (extraído de la obra de Carlos Fonseca, *Bajo la bandera del sandinismo*, Managua: Editorial Nueva Nicaragua, 1983.)," *El sandinismo: documentos básicos*, recopilación del Instituto de Estudio del Sandinismo (Managua: Editorial Nueva Nicaragua, 1983), 261, 263; Carlos Fonseca, *Viva Sandino*, obras tomo 2 (Managua: Editorial Nueva Nicaragua, 1982), 21.
- 33) Fonseca, "Con la bandera de Sandino," 255.
- 34) Fonseca, *Viva Sandino*, 34.
- 35) Gould, "Nicaragua: la nación indohispana," 254.
- 36) 小林、5-6。

- 37) Fonseca, *Viva Sandino*, 35–36.
- 38) Fonseca, *Viva Sandino*, 40.
- 39) Fonseca, *Viva Sandino*, 47–48.
- 40) Fonseca, “Con la bandera de Sandino,” 262.
- 41) Fonseca, “Con la bandera de Sandino,” 270.
- 42) Fonseca, “Con la bandera de Sandino,” 272.
- 43) Fonseca, “Con la bandera de Sandino,” 283.
- 44) 一般的に、解放の神学は、貧しい人々や抑圧された人々の解放を通じて、階級、人種、性など様々な社会的差別から神学を解き放ち、教会内部の権威主義的な権力構造や教条主義からの解放を実現しようとするもので、貧しい人々を主体とした新しい教会の建設を目指そうとする思想・哲学とされる。
- 45) José Benito Escobar, *Ideario sandinista*, (Managua: Secretaría nacional propaganda y educación política, FSLN, sf.), 5. (本史料は1980年代前半に革命政権によって配布された小冊子である)

(原稿受理 2003年3月31日)